

英雄的でもなく、美しくもなく、人
人の誤解と嘲りのなかで死んでいっ
たイエス。裏切られ、見棄てられ、
犬の死よりもさらにみじめに^{なお}斃れた
イエス。彼はなぜ十字架の上で殺さ
れなければならなかったのか？——
幼くしてカトリックの洗礼を受け、
神なき国の信徒として長年苦しん
できた著者が、過去に書かれたあら
ゆる「イエス伝」をふまえて甦らせた
イエスの〈生〉の真実。



しょうがい
イエスの生涯

新潮文庫

草 123 = 16



昭和五十七年五月十五日 印刷
昭和五十七年五月二十五日 発行

著 者 遠 藤 周 作
えん どう しゅう さく

発 行 者 佐 藤 亮 一
さ とう りやう いち

発 行 所 株式 新 潮 社
かいしゃ しんしやうしゃ

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⑤ 印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本株式会社

© Shūsaku Endō 1982 Printed in Japan

ISBN4-10-112316-0 C0193

新 潮 文 庫

イエスの生涯

遠藤周作著



イエスの生涯

写真
泉
秀
樹

第一章 ナザレの日々を捨てて

彼の容貌を私たちは見たこともない。彼の声を私たちは聞いたこともない。

今から語るイエスはどんな顔をされていたのかも私たちは知らぬ。

無数の宗教画に想像で描かれたイエスの顔にはいつもある型^{パターン}がある。肩までかかる長い髪、ちぢれた髭^{ひげ}、やや頬骨の出た痩^やせた輪廓^{りんかく}。その型^{パターン}にもとづいて長い歳月の間、多くの芸術家たちは自分たちの哀^{かな}しみや祈り、その時代の苦患^{くげん}や悲願^{ひがん}をこめてイエスの顔を創りあげた。

だが初代教会の頃、イエスの顔はまだ、このような型^{パターン}をもってはいなかった。聖なる人の顔は描けるものではないという畏^{おそ}れと謙虚さから当時の画匠たちは露^{あらわ}にはイエスの面貌^{めんぼう}を描くのを避けて、魚とか仔羊^{こひつじ}とか、麦の穂、葡萄^{ぶどう}の蔓^{つる}というシンボルを使って「彼等の主」を表現したのである。カタコンベ時代、イエスはギリシヤ的な若者の姿で——現在の多くのイエス像とはちがい髭のない青年の顔で描かれた。そしてやがて五世紀以後のビザンチン美術の影響が現在までのイエスの顔の原型をつくりあげた。そしてそれらの絵をみるたび、我々は長い人間の精神史が、最も美しく、最も浄^{きよ}らかで、最も聖なる人の面貌をどのように創^{つく}っていったかを

知ることができる。

だが事実のイエスの姿や顔は彼と共に生きた者、彼がその人生を横切った人間以外、だれも見ではおらぬ。イエスの生涯を語る聖書でさえ、全くといっていいほど彼の外貌にふれてはいない。にもかかわらず聖書を読む時、私たちがイエスのイメージをなぜか思いうかべることができるのは、彼を知った人たちが生涯、忘れることができなかったためであろう。

聖書がイエスの顔についてほとんど何も語っておらぬ以上、我々はそれを手さぐりで想像するより仕方がない。シユタウファーによると当時のユダヤ教は神の教えを説く者は「背のたかい、身体強健なもの」と規定しており、この規定にはずれた者は人々から冷たくあしらわれ、批判される習慣があったと書いている。もしこの説が本当なら、聖書にはイエスの外見について人々の侮蔑する記事が書かれていない以上、当時のユダヤ人としては普通の身長を持っておられたのかもしれない。そして古代パレスチナのユダヤ人と同様、彼もまた黒い髪を真中からわけて肩まで伸ばし、あご鬚ひげと口髭とをはやしていたことも考えられる。

ごく普通の顔だち、ごく普通の髭や髪、そしてマルコ福音書によると彼は弟子たちに「並みの履物と一枚の下着」しか持つことを許されていないから、やや、みすばらしい服装——それが我々のやつとつかめるイエスの外形なのである。

イエス——厳密に言うといエズア Jeshouah というこの名もまた、どこにでもある平凡な名前だった。ローマ時代『ユダヤ古代史』を書いたユダヤの史家フラビウス・ヨセフスによれば、

当時、この名の持主は腐るほどいたと言うことだ。要するにイエスはその短い生涯の間、外観でも名前でも決して目だつことのない、平凡で、生活の匂いのする多くの人間と少しも変りのない姿をされていたのだ。

ヨハネ福音書八章五十七節によれば、人々は三十歳代のイエスを見て五十歳にならぬのと言っている。この言葉は色々と解釈できようが、ひよっとするとおそらく年よりはイエスは老けて見えたのかもしれない。年より老けて見えたのは、その面貌に名ざすことのできぬ苦しみの影がいつもあったのかもしれない。疲れたその眼に苦しげな光が漂っていたのかもしれない。

もしそうだとするならば、この光はいつ頃から彼の眼に宿ったのであろうか。やがてイエスの肩の上に、彼がその人生を横切られた多くの男女の人生がのしかかるのだが、それは彼がナザレの町で大工をやっておられた頃から既に始まったのだろうか。

イエスが育ったガリラヤのナザレの町。それは今日では観光客や物売りの喧騒けんそうにみちているが、オリーブびんと糸杉いとけと傘松の丘に囲まれたこの町をそれらの騒がしさのなかでじっと見ていると、到るところにみじめな人生が眼に映る。物乞いはだしをする裸足の子供たち。観光客に手を出す盲人や跛びつこの乞食じき。汚水によごれた坂路さかみちの両側には狭い、暗い、小さな家々と店とが並んでいる。ヨハネ福音書には「ナザレにはよきものはない」と当時の人々が言っていたことが書かれているが（ヨハネ、一ノ四十六）、イエスの時代には、ここはほとんどユダヤ人たちには関心のない田舎町にすぎず、そこに住む者の生活は今よりもっと貧しかったにちがいない。庶民たちの

住家は白く石灰を塗った、窓も一つしかない暗い穴蔵のようなもので、今日、ナザレには当時のそんな家が保存されているが、それを見るとイエスもどんな家に住まわれていたか想像できるのである。

養父ヨゼフは大工だったから、イエスもまたその仕事を習われた。当時、ユダヤ人たちはその職業を示すものを——たとえば染物師は色のついた布を、公証人は羽ペンを——身につける習慣があった。だからイエスもこの頃、大工を示す木片を体のどこかにつけておられたのかもしれぬ。大工といってもその仕事は建物や家を建てるのではなく、むしろ細工師というべきもので、しかもガリラヤの大工の多くは巡回労働者だったから、彼も固定した店を持っておられたのではなく、ナザレの町やその周りを求めに应じて歩きながら仕事をされたのであろう。貧しさとか、生活の苦勞、働く男女の汗の臭いをイエスが身にしみて知っておられたことは、聖書に出てくる彼のたとえはなし譬話をよむとはつきり感じられる。一枚の失った銀貨を家中さがしまわる女の話は、ひよっとすると彼の家庭で起ったことなのかもしれぬ。三斗の粉のなかにパン種を入れる女の話は、ひよっとすると、母マリアのことだったかもしれぬ。

養父ヨゼフがいつ死んだかは、古い言い伝えだとイエス十九歳の時というが、聖書には何も書かれていない。それがこのナザレでの生活の間だとすると以後、母マリアを養うことはイエスの双肩にかかっていたように思われる。イエスに兄弟が何人いたかも不明で、プロテスタントの学者のなかにはマタイ十三章五十五節やマルコ六章三節の記述から彼にヤコブ、ヨゼフ、

シモン、ユダの四兄弟とかなりの姉妹がいたと言う人もいるが、カトリック側はイエスには兄弟はなく、マタイやマルコののべる兄弟^{アッハ}や姉妹^{アホツト}という言葉は中近東の習慣から従兄弟^{いとこ}、従姉妹^{いとこ}たちを指すのだと考えている。けだしヘブライ語には「いとこ」を指す正確な言葉がないからである。いずれにしろイエスは三十歳から四十歳の間まではこうした近親者の多くと、ほとんど共同生活にちかい毎日を送りながら、日々の糧をえるため働いておられたのである。

巡回労働者として彼が毎日みたのは、生活の辛さや貧しさだけではなかった。聖書のなかには惨めな不具者や病人が次々と出てくるが、そうした人たちはナザレやその周辺の到る所にも住んでいた。この土地は昼間の暑さと夜の冷たさが烈しいため、昔から東風の季節には肺炎で死ぬ者が多い。赤痢もしばしば発生し、特にガリラヤ湖やヨルダン川のほとりではマラリヤ病が流行する。聖書に出てくる「悪霊に憑^つかれた者」や「高い熱病患者」とはこのマラリヤ病にかかった病人を言うのであろう。

夏には埃^{ほこり}と強烈な紫外線のため眼病を患う者も多かった。聖書には「癩^{らいびよう}病患者」も登場するが、この癩者たちは群れをなし、頭の毛をそり、町や村から離れて住まねばならなかった。そして不幸なことには癩者たちは人々から肉体的だけではなく、神の罰をうけた不浄な者として嫌悪されていたのである。

幸いなるかな 心貧しき人
幸いなるかな 泣く人

天国は彼等のものなればなり
彼等は慰めらるべければなり

後年、ガリラヤの丘でイエスは人々にこの言葉を^{つぶや}呟かれた。だがおそらく彼の「神の国」の姿をいきいきとのべたこの言葉と現実のナザレのみじめさとの間には、なんという隔たりがあつたことだろう。貧しき者に神はまだ天国を与えてはいない。病に泣く人に神は慰めを与えていない。神はこうした見棄てられた者たちの悲惨さに沈黙を守っておられるのか。それとも外形、悲惨にみえるもののなかに、今は測りしれぬ深い^{なぞ}謎がかくされているのか。

私はこの疑問がナザレ時代のイエスの心に湧^わかなかつたとは絶対に思えぬ。聖書のなかで我々は不幸な男女の哀しみにとけこもうとする彼の姿を到るところにみる。長い歲月の間を血漏^{ろう}という病で苦しんだ一人の女がおずおずとふれた指先からさえも、彼女の過半生の不倖^{ふあひ}せをすべて感じた彼である。泣く人よ、彼等は慰めらるべければなり、というガリラヤの丘での言葉には彼が神に求める本質的なものがある。ナザレの大工時代にイエスは既にこの祈りと現実との隔^{とこ}たりを誰よりも感じておられた筈である。感じておられたからこそ、その顔は次第に従^い兄弟^{とこ}たちよりは老けてみえ、その眼には時として苦しみの色が浮んだのであろう。巡回労働者としてナザレの町やその周りを歩きながら、イエスは心の飢えに苦しまれていた。彼の心はいつも充たされなかつたのである。

ナザレにほど遠くないガリラヤ湖の周辺には避寒地ティベリヤの町があつた。そこにはヘロデ・アンテパス王の別荘があり、富裕な階級の生活があつた。この町にはイエスたちの生活とは縁のないローマ風な習慣が浸透していた。

時代はこのパレスチナが大ローマ帝国の東部国境ちかくに位置する属国の時である。ガリラヤはヨルダン川東部と共にローマ皇帝から一応、その地位を認められたヘロデ・アンテパス王の支配下に置かれていた。ローマはシリヤに総督を送り、ユダヤには知事を派遣してこの植民地を分割する分国王たちを監視させ、分国王たちがローマへの忠誠を守る限り、領国内での経済と法との権利と私兵を持つことを認めたのである。

ガリラヤの支配者、ヘロデ・アンテパス王の父、ヘロデ大王は一方ではローマ皇帝に追従しながら、他方ではユダヤ人の宗教感情や自尊心を刺激しないよう狡猾こうかくにたちまわったが、その子アンテパスも父以上にローマ皇帝に阿諛あゆすることでの地位を守りつづけた。彼がペレアの町を造りなおして、これをローマ皇帝アウグストの妃リビアに擬し、ユリアと名づけ、アウグスト皇帝のあとティベリウス皇帝が即位するとガリラヤ湖の西岸にローマ風の町をつくり、ティベリヤと呼んだのもそのためである。

そうしたヘロデ・アンテパス王のローマ迎合主義に、ガリラヤの住民たちは必ずしもいい顔をしなかった。いや、むしろ敵意と不満の眼でローマにたいする妥協と追従とを眺めていた。もともとガリラヤには雑多な住民が雑居していたが、彼等はいささかユダヤ教の強い信奉者であり、排他的な感情をもち、ユダヤ教を墮落させるローマの風習や宗教に侮蔑の感情をもっていった。時としてその感情は反ローマの一揆いっぎと変り、やがてのべる熱心党ゼロテとよぶ反ローマのテロリストたちの温床地をつくりあげる結果にもなったのである。だからユダヤに送られたローマ

人知事は、いつも過越祭すぎこし*にエルサレムの神殿を訪れるガリラヤの巡礼者たちの暴動を怖れたのである。

ナザレで育ったイエスがこのガリラヤ人の伝統的感情をどのくらい持たれていたか、聖書はあらわに記述していない。だが我々はやがて彼をエルサレムで訊問するアンテパス王とイエスとの間に、ギリシャ・ローマの風習に染められた者と純粹のガリラヤ人との対立の臭いをかぐこともできる。そしてまたイエスがアンテパス王のつくった町をいつも避けて歩かれたことを、聖書の記述からおぼろげながら感じるのである。

一介のナザレの大工にすぎぬイエスには、ティベリヤの富裕階級たちの生活はあまりに縁が遠かった。ヘロデ・アンテパス王を含めてこれらの階級に浸透したギリシャ・ローマ的な風習や考え方とも無縁だった。「イエスの思想のなかにはギリシャ的生活様式の影響の跡は少しも見られぬ」というボルンカムの説はこの点、正しいのである。

ヘロデ・アンテパス王や富裕階級たちにたいしてだけではなく、ガリラヤ人のなかにはローマ帝国と妥協してその權威を守っているエルサレムの祭司階級にたいする不満を持つ者も多かった。けだしこれらのエルサレムの祭司階級たちはユダヤ教の純粹を歪めゆがていると思われたからである。イエスの裡うちにこのガリラヤ人の感情がどのように育ったかは、あとになって書くつもりである。

ガリラヤの庶民たちは他のユダヤ人と同様、幼い時から大人たちに彼等の生活と精神との規

範である律法トーラを聞かされる。少年になればユダヤ教の会堂シナゴグで大人たちと声をあわせて預言書や詩篇*2を読む。このナザレでの生活の間、イエスは一方では彼自身もその一人である庶民の生活のなかで、働く者の汗の臭い、みじめさ、貧しさをたつぷり味わわれ、他方では皆と共に旧約のさまざまな書を会堂シナゴグで読んでおられたにちがいない。

要するに外形においてイエスはナザレの町でほとんど目だたぬ一人の若い大工にすぎなかった。その名もありふれた名前であり、その生活も他の者たちと変らず、その日常もひそやかだった。ただ彼の顔は年より老けてみえ、その眼に時折、苦しみの色が浮ぶことはあっても誰もが、その心に何がひそんでいるかを知らなかったようである……。

ローマのティベリウス皇帝の十五年、聖都エルサレムの南に荒涼と拡がるユダの荒野に毛皮をまとい、革の帯をしめた炎のような預言者の姿があらわれた。後に言う洗者ヨハネがそれである。伝承によれば彼はエルサレムの南西七軒キロのアインカリムの生れで、レビ族の祭司階級に属し、青年期に達した時この荒野に身をかくした。

長い長い歲月の間、ユダヤ人たちは預言者の現われるのを待望していた。預言者とは文字通り、神の言葉を預かる者の意味であって未来を予言する者の意味ではない。

当時のユダヤ人の宗教感情を日本人の我々が理解するのは極端にむづかしい。長い時代にわたって異邦人たちに占領されているという屈辱感とそこから生じる自尊心はもとより、彼等が

その失意と絶望からしがみついた自分たちの民族的な神ヤウエへの信仰や、そのヤウエがいつか自分たちに送ってくれる救い主^{メシヤ}への深い待望の気持はあらゆる聖書解説書に書いてはあるが、我々日本人には理解しにくいものである。

彼等の国土は小さかったが、その小さな国土はペルシヤによる支配から始まって、ギリシヤ、エジプト、シリヤ、パルチア、そしてローマとはとんど五百数十年にわたって外国の支配下にあった。その支配下の間、拘束と制約とのなかでユダヤ人たちは二つのものだけは頑としてゆるさずろうとはしなかった。その一つは彼等の宗教であり、彼等の神ヤウエにたいする信仰である。もう一つはそのヤウエがいつの日か、かつてのダビデ王のような民族的な救い主^{メシヤ}を送り、ふたたびユダヤの国土と誇りとをとり戻してくれるという絶対^{はんしん}にちかい希望とである。彼等のヤウエへの一神的な信仰は異邦人と征服者たちの汎^{はんしん}神的な宗教にしばしば脅かされつづけてきたが、そのたびごとにこれに反抗する預言者とそれに従う者たちによって守り続けられてきた。預言者とは先にも述べたように神ヤウエの言葉を預かる者の意味だが、それは同時に異邦人たちの宗教や風習に腐蝕^{ふしょく}しかかったユダヤ人たちに烈しい警告を与える指導者を指したのである。

預言者たちは神の怒り、神の罰を説き、人々に悔い改めを強く迫った。彼等はそのために権力者たちに迫害されねばならなかった。預言者たちはユダヤ人にふたたび栄光と誇りとが戻る「神の国」の近いことを説いた。だが現実にはその神の国は出現せず、ユダヤ人たちは五百数

十年の間、その国土が夷狄^{いでき}の支配するままになっているのを見ねばならなかった。にもかかわらず彼等の切ない希望と期待はこのイエスの時代にも消えてはいなかったのである。「主よ、いずこにさりし日の汝^{なんじ}の愛ありや。王ダビデに誓われし御言葉は何処^{いすこ}にぞある。外国^{とくこ}の民の前に恥辱を忍ぶ汝^{なんじ}の民を想い給え」(詩篇)の烈しい歎^{なげ}きはこのユダヤ人の感情をはつきりとあらわしている。

ティベリウス皇帝十五年目に死海とヨルダン川下流にはさまれた荒涼たるユダの荒野に待望していた預言者ヨハネが遂にあらわれたという噂^{うわさ}はユダヤ人たちの間に急速に拡がっていったにちがいない。噂を耳にした彼等は自分たちが親しんできたイザヤ書^{イザヤ書}の次の言葉を思い浮べた筈である。

「荒野に呼ばわる者の声ありて曰^{いわ}く。汝等、主の道をそなえ、その径^{みち}を直くせよ……」

その言葉通り、ヨハネは荒野に姿をあらわし、今、こう言っているのだ。「汝等、蝮^{まむし}の裔^{すえ}よ。来るべき神の怒りを逃るることを誰か汝等に教えしぞ。……既に斧^{おの}は根におかれたり。すべて善き果^みを結ばざる樹は切られて火に投げ入れらるべし」

神の国の出現する日は近い。そのためには悔い改めよ。悔い改めよと叫ぶヨハネの声はエルサレムは勿論^{もちろん}、このガリラヤの田舎町、ナザレにも届いた。その叫びはユダヤ教の強い信奉者であり、排他的な感情をもつガリラヤ人の心をたしかに捉^{とら}えた。彼等はローマの風習や宗教が今、自分たちの世界に侵入しているのを毎日、見ていたからである。ティベリヤやユリアの町